

## 釣瓶落峠

釣瓶落峠は、青森県と秋田県の県境にまたがっている。その名前は「釣瓶落とし」を意味し、釣瓶トンネルが建設されるまで、そこを渡る旅人が越えなければならなかった 200m の険しい崖を指す。

峠からは 2 つの異なる風景が見える。それぞれの峡谷の東側では、日光にさらされるにつれて雪解けが進み、山の斜面が次々に侵食され、丘の中腹に横たわる火山岩である凝灰岩の白い尾根がむき出しになる。反対側では、日陰が多く、雪はゆっくりと解け、より多くの植物が根を張ることができる。斜面には、針葉樹林に混じって落葉低木が生えており、それらは主にサワラヒノキやスギである。緑の針葉樹と対照的な落葉低木の暖色により、この峠は有名な秋の紅葉スポットになった。

峡谷のふもとには、藤琴川に沿って古い鉱山道が伸びている。これは、17 世紀から 1958 年まで操業していた歴史ある銅山、太良鉱山の跡地である。釣瓶落峠を通る交通の大部分は、鉱山への物資の往来に関連しており、20 世紀初頭には、この集落に 900 人以上が暮らしていた。

他の歴史的に重要な事柄は、明治時代が始まった 1868 年、この社会の激変の折に起こった。この峠は、不和の仲であった津軽藩（現在の青森）と久保田藩（現在の秋田）の藩境としては脆弱であった。これを知った久保田藩は、ここに地元のマタギを数名配置した。その任務はたくさんの松明をたき続けることであったが、それは、峠が厳重に見張られているように見せるかけるためであった。